

# 中川正春の永田町かわら版

2005/5/9 第234号

【編集元】民主党三重第2区総支部 衆議院議員中川正春事務所

E-mail: g03063@shugiin.go.jp

三重／〒513-0013 鈴鹿市国分町453-7 TEL:0593-73-3933/FAX:0593-74-3088

東京／〒100-8981 千代田区永田町2-2-1衆議院第一議員会館428号室 TEL:03-3508-7128/FAX:03-3508-3428

## ○憲法の本格論議始まる。

憲法9条議論の基本にしていく論点をまとめました。

第一に、現在の憲法に流れる平和主義、日本の国家としての理想をこれからもしっかり守っていこうということ。第二に、国の防衛力は、専守防衛(他国からの武力攻撃から国を自衛するための必要最小限の武力保持)を原則とすること。第三に、国連の主導による平和構築のための国際貢献には積極的に参加をしていく。ただし、武力行使については抑制的であることを原則とする。

このような3原則を基に、連休明けから、民主党の中の憲法9条の小委員会でも本格的な議論に入っていこうと思います。その他、新しい人権についての議論や憲法裁判所、内閣や国会のあり方など、それぞれの課題を同時に議論していきます。

「中川さん、民主党の中は、うまくまとまるのかな？頑張つてよ。」と励まされます。大丈夫、基本原則では、皆に大きな隔たりはないと確信しています。

## ○韓国は竹島。モンゴルは黄砂。

連休を利用して、仲間の議員たちと韓国とモンゴルに行きました。

韓国では、竹島の問題。学者、マスコミと同時に、韓国国会の独島(竹島の韓国名)を含む日本との諸懸案を議論する特別委員会のメンバーと議論しました。

「韓国は、独島と呼んで領有権を主張し、日本は竹島を固有の領土と主張する。それでいいではないか。第三者の裁定でもなければ領土問題は最終の解決は出来ない。その上で、お互いがケンカせずはどうすればうまく行くのかそれを考えよう。大事なことは、現実現場で争う漁業者の利害を調整する事だ。共同管理水域での漁獲高の割り当てと資源保護のための管理ルールを作ることに、韓国も協力すべきだ。漁業者のケンカを国の争いにしてはならない。」これが私の主張でした。

韓国側は、「独島は、歴史認識の問題だ。」と言います。「朝鮮半島の日本への併合は、1905年の独島の領有を日本が確定したことから始まった。

独島は、韓国人にとっては、日本の植民地政策の象徴なんだと言う事を理解していれば、漁業問題に矮小化するような議論は、決して出てこないはずだ。日本政府にその認識がないから、島根県の議会決議の動きをそのまま放置をした。何回も謝れということではなくて、私たちの思いを理解して欲しいということだ。」きついやり取りもありましたが、彼らの主張を要約するとこんな事でしょうか。

北朝鮮の諜報部や軍の幹部で、最近になって脱北してきたメンバーにもまる一日かけて聞き取りをしました。「日本から拉致されて、諜報部管轄に配置されていた日本人は、証言者が認識していただだけでも22人の顔を認識できる。」こんな話まで飛び出してきました。私は、いつも話題になるファン・ジョンヨブ氏も含め、情報をもっている脱北者に、このような証言を日本の国会の中でして欲しいと働きかけています。韓国のノムヒョン政権が、この人たちを管理して、日本に出す事を頑として許さないことは、理解できません。日本の首相官邸や外務省も腰が引けています。

モンゴルでは、春風に乗って日本にも吹き込んでくる黄砂を植樹によるグリーンベルトで防ごうという構想があります。これに対して、日本がどのような貢献ができるかを考えに行きました。同時に、私の親友のバーバル元大蔵大臣が、北朝鮮の難民をモンゴルの農園や建設現場で外国人労働者として受け入れるプロジェクトを組み立てたいと言う提案をしています。晴天で始まったら突然、雪になったり、氷点下に下がって雹が降ってきたり、黄砂の舞い上がる春の嵐の中で現場の視察をしました。

現地のホスト、バタムディンの家族が私たちのために羊を一頭つぶしてくれました。ゲル(内モンゴルのパオ)の中でストーブの上に大きな鍋をのせ、塩味だけのシンプルな調理。日本のラム肉とは違って、ニオイもクセもなし。鯛の兜煮は海洋国日本。モンゴルの草原では羊の頭がそのまま出てきた時には、やっぱりここはジンギスカンの国だと後ずさりしましたが、肉自体のうまみが口の中に広がり、至福の時を過ごしました。